子どもと話すときの「七不思議」

～なぜ、保育者や保護者は生き物に「さん」「ちゃん」などの敬称をつけるのだろうか？～

よく、幼児と話すときに保育者（保護者）は動物などの生き物に敬称（「さん」「ちゃん」など）をつけて話しをよくします。また、擬人化することも多くします。

なぜ、犬なら犬、猫なら猫と言わず「わんちゃん、ねこちゃん」など正しい名称で言わなかったり余分なものをつけてしまうのだろうか？そこには理由があるのかもしれない。敬称の使用と擬人化それぞれの不思議について、考えてみました。

敬称（「さん」「くん」「ちゃん」）をつけて愛着や親しみを育む

保育者（保護者）が動物に対して「さん」「くん」「ちゃん」といった敬称表現を用いるねらいは、主に幼児の生物に対する親しみの感情の育ち、生命尊重の意識の育ち、道徳性・思いやりの気持ちの育ちを促すことに意識しているからでしょう。

【愛着・親しみを育む】

・ 身近な存在として認識させる

敬称表現は、動物をより身近に感じられるようにして、親しみを持つことにつなげ「親しみの感情の育ち」を持てるようになってもらう。

・ 情緒的なつながりの形成

幼児が動物と情緒的なつながりを持っている場合、あるいはその形成が必要だと認識した場合に、敬称表現を用いて身近かな存在と思って欲しい。

特に、幼児が動物と仲良く遊んでいる場面や、動物をいじめている場面で、敬称表現が用いられる頻度が高くなることが示されています。（昔話もよく読む）

【生命尊重・思いやりを育む】

・ 命の平等性の認識

敬称を用いることで、動物に対して人間と同様の命をもつ存在と認識することを促すねらいがあります。動物も人間も【同じ】命がある生物だと知ってほしいといった願いがある為名前をつけたりする。

・ 自分と同等の立場としての認識

敬称表現は、子どもが動物を自分に置き換えたり、周りの友達と【同じ】立場で考えるきっかけづくりになると考えられます。

これは、幼児がまだ「生物と無生物」の認識が発達途上であり、動物を「物」と同様に扱ったり、いじめたりする遊びにつながる可能性がある場面において、動物などにふさわしい思いやりの気持ちを持ってもらいたいからだと考えられます。

【擬人化する】

擬人的表現とは、ヒトではないものに対して、ヒトの特徴をあてはめて用いる表現です。

例「チューリップさんが水を飲ませてもらって、うれしそうにしているよ」。

「キュウリさんが、元気がないね、水を飲ませてあげようか。」

敬称表現（さん付け）は、この擬人的表現と並んで、特徴的で独特な言葉かけです。

擬人的表現を用いることで幼児の認知的な特徴への対応と対象への愛着の促しになるでしょう。

【認知的な理由（理解の促進）】

・ 幼児の思考様式との対応

擬人的表現は、幼児に顕著に見られる擬人的思考だと思います。動物やぬいぐるみなどのおもちゃに名前を付ける行動が多くみられるのもこの事でしょう。

・ 身近な「たとえ」による理解

幼児は、十分な知識がない生物に対して、自分がよく知っているヒトについての知識をあてはめることで、例えて認識しようとしていると考えられます。そのため、思考しやすい擬人的表現は、幼児にとって理解しやすいでしょう。

【情緒的な理由（愛着・親しみ）】

・ 親しみと愛着の形成

擬人的表現は、対象に対して親しみを感じさせ、愛着を持たせるといった効果もあります。

・ 効果への認識

擬人的表現は 3～4 歳児に対して有効だと思います。擬人化することで「もの」に温かみや柔らかさが付与され、穏やかに対話ができる様になる。

このように敬称をつけたり擬人化することで生命尊重や思いやる心を育むツールとして活用していけば、幼児の認知的な理解を助けつつ、人や動物、物に対する親しみや愛情を深められるでしょう。

追伸、苦手な生き物に対してはあまり敬称をつけない傾向があります。人には好き嫌いがあるのですが可能な限り敬称をつけて話してあげれれば、穏やかな空気が流れるかもしれません。